

退職の挨拶



雑草と里山の科学教育研究センター
小金澤正昭

平成3年9月に附属演習林の講師として着任し、以来22年間、演習林に勤務し、3年前に雑草と里山の科学教育研究センターに移り、足かけ25年の大学生生活でした。振り返ると、実に多くの方々にお世話になり、支えていただきました。こうして、無事、退職の日を迎えることができたことに、深く感謝申し上げます。

昭和40年代、日本の野生動物は、このままでは絶滅すると多くの研究者が危惧するほど、深刻な状況にありました。ところが、平成に入ると、シカやサル、イノシシといった動物たちがその数を増加させ、農林業被害が生じるようになってきました。さらに、平成10年に入ると、鳥獣による農林業被害は、全国的に広がり、深刻な社会問題となってきました。

そのような中、平成21年度に文部科学省の科学技術振興調整費事業の一つとして提案した、「里山野生鳥獣管理技術者養成プログラム」が採択され、5年間のプログラムとして、栃木県と大学が連携して取り組むこととなりました。この背景には、現場で被害問題と鳥獣保護に取り組んできた県職員や市町村職員、そして研究者の現状に対する率直な思いがありました。すなわち、鳥獣害対策を地元で指導助言する人材が圧倒的に不足していることと、鳥獣の生態や防除方法についての知識が全く蓄積されていない現状があり、この現状を変えないかぎり、鳥獣害を減少させることはできないという思いでした。このプログラムは、鳥獣管理を担う技術者を養成し、各現場へ配置するとともに、鳥獣害を防除する最新の知識と技術を普及させるための人的ネットワークを形成しようとするものでした。現在までに、この講座を修了した鳥獣管理士は116名になり、各地で活躍しています。今後も、鳥獣被害の軽減と野生鳥獣の保全に向けて、鳥獣管理士の養成を続けていきたいと願っています。



生物資源科学科 動物育種繁殖学
吉澤 緑

私は、宇都宮大学農学部で学部4年間、大学院2年間、そして昭和52年4月に助手に採用後の39年間、計45年間の長きに渡りお世話になりました。大学院で村松隆先生から研究に対する姿勢、実験手技、結果の見方、考え方、論文の書き方に至るまで、懇切丁寧なご指導を賜り、研究の面白さに目覚めました。大学院修了時に、助手として残していただき、英語論文の執筆の一端から教示いただき、真っ赤になるまで原稿を直されたものでした。種々の実験を重ねながら一段階ごとに論文をまとめ、1報書く度に拙いながら英語論文らしきものとなっていきました。村松先生は学部長等の要職でご多忙ながらも、英語論文の校閲を楽しそうにしてくださいました。

畜産学科入学時30名のクラスで女性は私一人、4年生に一人女性の先輩がおられ、大学院進学も女性としては初めてで、母の大反対を説き伏せての進学でした。就職3年目の54年12月に林学科助手であった吉澤伸夫と結婚し、最大の理解者を得ることで研究にのめり込むことができました。

研究は、村松先生から教授されたマウス体内受精卵の染色体標本作製法を改良して新たな方法を開発し、さらに染色体の分染法を考案して学会発表等を行っていました。学会でマウス体外受精の世界的な権威の豊田裕先生のお話を伺うたびに、様々な実験の構想が膨らんでいったものでした。その後ウシやブタも含めた哺乳動物の体外受精を根付かせて、体外受精初期胚の染色体研究を行えるようになりました。村松先生や岡本昭先生のお蔭で平成元年から2年に東北大学の家畜繁殖学教室（正木淳二教授）へ内地留学し学位論文を纏め、平成2年1月18日に農学博士を授与されました。その後、参考文献で引用していたマウス体外受精の大家のLynn Fraserの下に3か月、大学から派遣され、彼女とファーストネームで呼び合う仲間になれたことは大きな喜びでした。多くの先輩、先生方のご指導とご支援を受け様々な幸運に恵まれたことや卒業生との楽しかった日々を想い出しています。ありがとうございました。

今年度定年退職予定の教員

平成29年3月をもちまして、以下の教員が退職されます。平成29年3月までの連絡先は、以下の通りです。

- ・後藤 章先生 農業環境工学科 028 - 649 - 5497 goto@cc.utsunomiya-u.ac.jp
- ・上田 俊策先生 応用生命科学科 028 - 649 - 5475 uedashun@cc.ustunomiya-u.ac.jp
- ・米山 弘一先生 バイオサイエンス教育研究センター 028 - 649 - 5152 yoneyama@cc.utsunomiya-u.ac.jp



生物資源科学科 動物栄養制御学
菅原 邦生

私は昭和48年3月に畜産学科を卒業し、その後2年間名古屋大学大学院修士課程をへて、50年4月に、助手として畜産学科（学科改組で、生物生産科学科から生物資源科学科）に赴任して、今年の3月まで41年間峰が丘の農学部棟で過ごしました。途中（平成4から5年）大阪大学の蛋白質研究所に10ヶ月内地研究員として出かけた時のをぞくと、40年間ほとんど変わらない環境で過ごしたことになると思います。今考えてみると、大過なくよくここまで来たものだと思います。教職員と学生諸子に励まされ、支えられたおかげであります。感謝いたします。

赴任当初は昭和50年を過ぎても学生運動が続いていたので、落ち着かない日々を過ごしていました。55年頃からは本格的に研究を始め、同窓会員の先生方には助けていただいたり、励ましていただいたりして、なんとか博士の学位をいただきました。

その後は学位論文の研究を進展させようと試行錯誤し、色んなことに手を出して十分な成果を上げることができませんでした。しかし、精神的な余裕ができたのか、学生諸君とソフトボールやキャンプ、構内でのカラオケ、BBQなどを楽しみました。また、先生方と昼休みのテニスにも励みました。

平成7年に教授になってから、学内の委員や所属学会の役員の仕事を引き受け、多忙な日々を過ごしました。後半の20年間は大学「改革」がいろんな形で実施され、赴任当時は考えられなかったような状況になりました。印象深いというか今でも納得いかないのは、専門科目以外の共通教育科目の英語2単位を学部教員に担当させたことです。これより前に、生物学関連の授業を担当したことはありませんでしたが、英語まで「教える？」ようになるのは驚きで、試行錯誤の連続でした。教養部を廃止し、大学の教育を4年一貫教育にした「改革」の産物でした。定年退職前の数年間はさらに「改革」が「強化」され、教職員の数は増えない状況で、新たな業務が導入され、余裕がない日々を過ごしました。

同窓会の仕事は本学の卒業教員として常務理事等を務めました。後半の二十年あまりは、同窓会に貢献したことはありません。逆に、平成26年にはインドネシアでの国際会議に参加する費用の一部を補助していただき感謝しています。

宇都宮大学農学部と峰が丘同窓会の発展を祈って、筆を擱きます。



追悼

若林先生を偲ぶ



去る6月7日、本学名誉教授で農学部附属農場長も務められました若林荘一先生が93歳で逝去されました。先生は1922年、東京都新宿区に生まれました。この年は偶然にも宇都宮高等農林が設立された年であり、本学で教鞭を執

られたのも何かの縁を感じます。東京帝国大学在学中に学徒出陣で中国戦線に出征、その後中国の病院で終戦を迎えられました。東北大学を経て、1950年から38年の長きに亘り本学で研究・教育にあたられました。

退官後は、囲碁や旅行、考古学研究、と実に多彩な趣味を嗜まれました。同時に、旧制高校時代に取り組みされた弓道の稽古を再開。週3回の稽古に励まれました。一昨年、御年92歳で参加された「ねんりんピック栃木」では、県内最高齢選手として大きな話題となりました。

俳句は毎年多く詠まれていたようで、90歳の時に編纂された22冊目の句集「真正九十翁」を頂きました。その際には「これは『くそじい』と読むんだよ」と阿々と笑っておられましたが、いずれも飾り気のない、深い句ばかりでした。先生の人柄をよく表しているものをいくつか紹介致します。

- ・山笑う横書き句集我一人
- ・青柳や父と巡りし中国路
- ・年用意妻のつくりし観音像（記念の仏像が出て来た）
- ・年用意息子夫婦に丸おんぶ（おかげでよい正月でした）
- ・大過なき九十年や蚯蚓鳴く
- ・天命のまま存えむ水中花
- ・吾亦紅松虫草を引き立てて

また、こうした趣味に加えて、様々なボランティア活動にも積極的に参加されました。とりわけグリーントラスト運動に熱心に取り組み、先生のご遺志により葬儀の香典は全てグリーントラストに寄付されました。

本年3月の卒業式の日、名誉教授の会にご参加いただきました折には、闘病中にも拘わらず、ご挨拶をいただきました。お帰りの際に大変強く握手していただいたのを憶えております。先生のご冥福を心よりお祈りいたしますとともに、先生には今後も同じ年の宇都宮大学を見守っていただきたいと願うばかりです。

（生物資源科学科 園芸学研究室 山根 健治）

